

2016年5月26日
(記者会見資料)

報道関係各位

公益財団法人 新日鉄住金文化財団

紀尾井シンフォニエッタ東京 新機軸導入のお知らせ
紀尾井ホール室内管弦楽団への改称・ロゴの導入
首席指揮者にライナー・ホーネック氏就任
2017年度からの新体制始動

公益財団法人 新日鉄住金文化財団(所在地:東京都千代田区紀尾井町6番5号、代表理事:佐久間総一郎)は、同財団が運営する紀尾井ホールのレジデント・オーケストラ「紀尾井シンフォニエッタ東京」を、2017年4月から「紀尾井ホール室内管弦楽団」に改称します。また、首席指揮者にはライナー・ホーネック氏が就任し、2017年度から新機軸による体制を始動しますので、お知らせします。

新機軸のテーマは「求心力」と「発信力」

新名称「紀尾井ホール室内管弦楽団」では、日本を代表するクラシック音楽ホールであり、「室内楽の殿堂」として国際的にも高い評価を得ている「紀尾井ホール」を冠すことで、ホールとの一体性や紀尾井ホールの求心力を強く打ち出します。紀尾井ホールこそが、このオーケストラの優れた音楽家たちが集いリハーサルから公演まで一貫して行える場所であり、その「求心力」と「発信力」を持っているからです。

また、「シンフォニエッタ」(小交響楽の意)は比較的小さな器楽アンサンブルを指すことが多いため、より明確な「室内管弦楽団」を採ることにしました。

音楽面での「求心力」としては、首席指揮者を設置します。また、楽団メンバーとの連携をさらに強化し、事務局と一体となった運営により、さらに「求心力」を高めていきます。

そして、首席指揮者や個々の楽団メンバーの国内そして海外での活躍は、当楽団の「発信力」にもつながるものでもあります。

そして、その「求心力」と「発信力」を体現するのが紀尾井ホール室内管弦楽団の新しいロゴです。

首席指揮者にはライナー・ホーネック氏

紀尾井ホール室内管弦楽団では、音楽的な求心力として、3年間の任期で首席指揮者にライナー・ホーネック氏を迎えます。

ウィーン・フィルのコンサートマスターであり、指揮者としても活動の幅を広げているホーネック氏は、オーケストラの響きの源泉となる弦楽器の演奏法に熟知し、ウィーン・フィルで数多くの国際的な指揮者やソリストとともに、古今のオーケストラ音楽をリーダーとして作り上げてきました。また、紀尾井シンフォニエッタ東京には指揮者やソリストとしてたびたび定期演奏会に登場していますが、これらの共演を通じて、当楽団メンバーの間にも強い信頼関係が育まれています。

2017年度以降の3年間にわたって、年3回の定期演奏会に登場します。＜モーツァルト選集＞やハイデン、シューベルトの作品など、ウィーン音楽のエキスパートならではの選曲、そして、＜ミュツスとロゴス＞のテーマに基づくプログラムなど多彩な曲目でお楽しみいただきます。

楽団メンバーによる運営参画機能の強化

これまでの紀尾井シンフォニエッタ東京では、楽団メンバーの互選によるプログラム委員、シーズンメンバー委員などにより、音楽的な方向付けや若い音楽家の育成において、楽団メンバーが運営に参画してきました。

新体制ではこれらに加え、楽団メンバーの運営参画機能をより強化するため、中長期的な事案を検討する「運営委員」、各楽器セクションの音楽的課題を解決する「パートリーダー」、お客様にとってより身近な存在となるよう広報面を担当し、当楽団の「発信力」を高めていく「PR委員」などを設置します。事務局は各委員との積極的な意見交換を通じて、さらに一体となった運営を目指します。

これにより、常に音楽的水準の高い演奏を継続的にお客様にお届けしながら、演奏団体として発展を目指し、楽団メンバーに若い世代を招き入れ、育成していく仕組みを整えていきます。

定期演奏会は継承

定期演奏会については「紀尾井シンフォニエッタ東京」からの通算回数で表示していきます。また、定期演奏会の開催時期はこれまで同様4月、6月、9月、11月(12月)、2月の年5回を予定しています。

紀尾井シンフォニエッタ東京の定期会員(レジデント・メンバー)の皆さまに関しては、紀尾井ホール室内管弦楽団への移行後もこれまでと同様にご継続の手続きを行えるように準備しています(7月末から継続手続き開始予定)。

2017年度の新規定期会員の募集は11月を予定しています。

以上

紀尾井ホール室内管弦楽団 ロゴマーク



紀尾井ホール
室内管弦楽団

Kioi Hall Chamber Orchestra Tokyo

新日鉄住金文化財団

このロゴマークは、今後とも、紀尾井ホールのレジデント・オーケストラとして伝統を継いでいくための「求心力」と「発信力」を象徴した形をとっています。

「求心力」と一体感をあらわす球体を中心にして俯瞰した円弧は、ステージ上に配置されたオーケストラを象徴し、毛筆調のはらいには、濃密で質の高い音楽を外に向かって放っていく「発信力」の意味を込めています。

基準色となる藍色は、江戸の伝統に根ざす紀尾井ホールの風土をあらわしています。

デザイン 瓶子デザイン事務所 <http://www.heishidesign.com/>
監修 大野 幸(こう) <http://kooono.com/>

紀尾井ホール室内管弦楽団

桂冠名誉指揮者	尾高忠明
首席指揮者	ライナー・ホーネック
桂冠演奏家	菅沼準二(ヴィオラ、東京藝術大学名誉教授)、 杉木峯夫(トランペット、東京藝術大学名誉教授) 河原泰則(コントラバス、元WDR交響楽団首席奏者)
コンサートマスター	玉井菜採、千々岩英一、アントン・バラホフスキー

紀尾井ホールを本拠とする紀尾井ホール室内管弦楽団は国内外の第一線で活躍する演奏家が集い、数多くのトップアーティストたちとの共演を経て、我が国を代表する室内オーケストラの一つとなっている。その高い演奏技術とアンサンブル能力に裏打ちされた豊かな音楽性には定評がある。

1995年紀尾井ホール開館時に同ホールを本拠とする演奏団体「紀尾井シンフォニエッタ東京」として発足。設立当初、尾高忠明(桂冠名誉指揮者)のリーダーシップのもと、緻密な構築性と豊かな表現力を築きあげ、高いクオリティの演奏活動を活発に繰り広げている。レパートリーは、モーツァルトやハイドン、ベートーヴェンの管弦楽作品はもとより、バロックから近現代まで幅広い。

現在では国内有数の優れた室内オーケストラとして広く知られ、本拠地・紀尾井ホールのほかに、北海道から九州まで、国内各地からの依頼による公演も数多い。また、豊田、大分の各コンサートホールではオープニング公演に出演している。

2000年には初の欧州公演を行い、ウィーン・ムジークフェライン、アムステルダム・コンセルトヘボウ、ザルツブルク・モーツァルテウムなどの名門ホールで大きな成功を収めた。また、2005年には「ドレスデン音楽祭2005」に招聘され、ペーター・レーゼルのベートーヴェン・ピアノ協奏曲全曲公演など4公演を行ない、聴衆から絶賛を博し、新聞・雑誌などでも高い評価を得た。2009年と2010年にはソウル公演を、2012年には日米桜百周年を記念して、フィラデルフィア、ワシントン、ボストン、ニューヨークで公演を行い、いずれも大きな喝采を浴びている。

2015年7月には世界的名指揮者セミヨン・ビシュコフのもと、第100回定期演奏会を開催。続いて古楽演奏の大家として知られるトレヴァー・ピノックを招き、創立20周年を記念してバッハ「ミサ曲短調」を演奏した。最近では紀尾井ホールでの定期演奏会をはじめ、2015年3月に和歌山、5月に「別府アルゲリッチ音楽祭」大分公演に出演。2016年には「別府アルゲリッチ音楽祭」東京公演、愛知などの各地で公演する。

CDの録音も積極的に取り組み、武満徹・室内管弦楽作品集「How slow the Wind」(BIS-SACD-1078/KKCC-2311/2001年)、M.ブルネロの指揮・チェロによるライブCD「マリオ・ブルネロ&紀尾井シンフォニエッタ東京」(VICC-60394/2004年)、プロコフィエフ「古典交響曲」などを収録した指揮者なし公演のライブCD(OVCL-00206/2005年)、川久保賜紀とともにライブ録音したヴィヴァルディ「四季」(AVCL25479/2009年)、A.ナヌト指揮によるベートーヴェン交響曲第5番「運命」(EXCL-00037/2010年)、ブラームス交響曲第4番(OVCL-00508/2014年)、編曲者自身の指揮によるバッハ=シトコヴェツキー「ゴルトベルク変奏曲」(マイスター・ミュージック)などをリリースし、いずれも高い完成度と優れた音楽性で好評を得ている。

2017年4月より首席指揮者にライナー・ホーネックを迎え、「紀尾井ホール室内管弦楽団」に改称し、新しいロゴ・マークのもと、紀尾井ホールを中心に国内・海外に活動の幅を広げながら、より一層洗練された音楽作りを目指して前進している。

(運営:新日鉄住金文化財団)

紀尾井ホール室内管弦楽団 楽団メンバー

(2016年5月26日時点)

コンサートマスター	玉井 葉採 千々岩英一 アントン・バラホフスキー	東京芸術大学准教授 パリ管弦楽団副コンサートマスター バイエルン放送交響楽団首席コンサートマスター
ヴァイオリン	井上 静香 今井 睦子 大関 博明 大宮 臨太郎 小川 有紀子 景山 裕子 鎌田 泉 千葉 純子 寺岡 有希子 徳江 尚子 野口 千代光 森岡 聡 山崎 貴子 山本 千鶴 山本 はづき 米谷 彩子	音楽祭参加など、幅広く活動 音楽祭参加など、幅広く活動 元国立音楽大学教授、元群馬交響楽団コンサートマスター NHK交響楽団アシスタント・コンサートマスター 仙台フィルハーモニー管弦楽団 副首席奏者 桐朋学園大学附属音楽教室講師 国内外の音楽祭参加など、幅広く活動 フェリス女学院大学、洗足学園大学講師 昭和音楽大学講師 ソロの他、室内楽で活動 東京芸術大学准教授、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師 セノーテ弦楽四重奏団 東京芸術大学非常勤講師 東京シンフォニエッタ ソロ・ヴァイオリン 群馬交響楽団第2ヴァイオリン首席奏者 米国 フロリダ州立セントラルフロリダ大学教授
ヴィオラ	安藤 裕子 伊藤 慧 小峰 航一 市坪 俊彦 篠崎 友美 鈴木 学 菅沼 準二 中村 智香子 馬淵 昌子 森口 恭子 菅野 博文 菊地 知也 河野 文昭 中木 健二 林 俊昭	東京芸術大学管弦楽研究部非常勤講師、元東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団首席奏者 セノーテ弦楽四重奏団 京都市交響楽団首席奏者 東京芸術大学准教授 新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者 東京都交響楽団首席奏者 東京芸術大学名誉教授 ソロの他、室内楽で活躍 トウキョウ・ミタカ・フィルハーモニア、昭和音楽大学非常勤講師。 読売日本交響楽団 昭和音楽大学教授 日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・チェリスト 東京芸術大学教授 東京芸術大学准教授 徳島文理大学教授、元大阪フィルハーモニー交響楽団首席奏者、 トウキョウ・ミタカ・フィルハーモニア
チェロ	丸山 泰雄 池松 宏 河原 泰則 永島 義男 吉田 秀 一戸 敦 難波 薫 野口 みお	東京交響楽団首席奏者 元ケルンWDR交響楽団首席奏者 東京芸術大学名誉教授、沖縄県立芸術大学客員教授 NHK交響楽団首席奏者 読売日本交響楽団 日本フィルハーモニー交響楽団 新日本フィルハーモニー交響楽団、武蔵野音楽大学非常勤講師
コントラバス	池田 昭子 嶋崎 耕三 広田 智之 森枝 繭子 金子 平 鈴木 高通 鈴木 豊人	NHK交響楽団、東京芸術大学非常勤講師 読売日本交響楽団首席奏者、桐朋学園大学准教授 東京都交響楽団首席奏者、桐朋学園大学特任教授、上野学園大学教授 上野学園大学非常勤講師 読売日本交響楽団首席奏者 元新日本フィルハーモニー交響楽団 アンサンブル・ベガ
フルート	大澤 昌生 堂阪 清高 水谷 上総 富成 裕一 丸山 勉 和田 博史	東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者 元東京都交響楽団首席奏者 NHK交響楽団首席奏者、東京音楽大学兼任教授、東京芸術大学講師 読売日本交響楽団、東京音楽大学非常勤講師 日本フィルハーモニー交響楽団客演首席奏者 東京都交響楽団
オーボエ	岡崎 耕二 杉木 峯夫 古田 俊博 近藤 高顕	東京都交響楽団首席奏者 東京芸術大学名誉教授、日本トランペット協会理事長 東京フィルハーモニー交響楽団首席奏者、東京芸術大学、洗足学園音楽大学講師 新日本フィルハーモニー交響楽団首席奏者
クラリネット		
ファゴット		
ホルン		
トランペット		
ティンパニ		

紀尾井ホール室内管弦楽団 首席指揮者

ライナー・ホーネック Rainer Honeck

(ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団コンサートマスター)



1961年オーストリアのネンツィング生まれ。7歳よりヴァイオリンを始め、ウィーン音楽芸術高校に学ぶ。アルフレート・シュタールにも師事。1978年ウィーン・フィルよりカール・ベーム基金の奨学金を授与される。1981年ウィーン国立歌劇場管弦楽団／ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に第一ヴァイオリン奏者として入団、1984年には同歌劇場管のコンサートマスターに、1992年にはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任。

ブレゲンツ音楽祭、プロムスなど、オーストリア、ヨーロッパ各地、日本、アメリカなどでソリストとして活躍。マリス・ヤンソンス指揮ウィーン・フィルとドヴォルザークの協奏曲、ダニエレ・ガッティ指揮ウィーン・フィルでベルグの協奏曲を共演、リッカルド・ムーティ指揮のもとモーツァルトの協奏交響曲(ヴィオラはトバイアス・リー)をウィーンにて、また日本、アメリカ・カーネギーホールなどでのツアーも行った。読売日本交響楽団には度々客演しており、2010年4月同楽団のモーツァルトシリーズに出演、名古屋フィルとはシューベルト全交響曲シリーズを指揮。

録音では、ウィーン・フィルのコンサートマスターとして小澤征爾指揮リムスキー=コルサコフ「シェヘラザード」ライブ録音、クリスティアン・ティーレマン指揮R.シュトラウス「英雄の生涯」、またドヴォルザーク／メンデルスゾーンの協奏曲をプラハにてチェコ・フィルと録音、シューベルトのヴァイオリンとピアノの全作品、モーツァルトの協奏曲2枚組などがある。

室内楽にも意欲的に取り組み、1989～1999年ウィーン・ヴィルトゥオーゼンの創立メンバー、1982～2004年ウィーン弦楽トリステンのリーダーとして活躍、2000年以降は、アンサンブル・ウィーン、ウィーン・ベルリン室内管弦楽団でも活発な活動を行い、多数のラジオ、テレビ出演、CDも多くリリースしている。ジェシー・ノーマン、キャスリン・バトル、アンジェリカ・キルヒシュラーガー、ホセ・カレーラス、アンドレ・プレヴィン、ユーリ・バシメットなどと長年に渡り共演を重ねている。

近年では指揮にも力を入れており、これまでに紀尾井シンフォニエッタ東京のほか、名古屋フィルハーモニー交響楽団、読売日本交響楽団、マルメ交響楽団などに招かれている。

オーストリア国立銀行貸与の1709製ストラディヴァリウス”ex-Hämmerle”を使用。

■首席指揮者就任にあたって(ホーネック氏からのメッセージ)

日本の音楽愛好家の皆さまへ

紀尾井ホール室内管弦楽団の首席指揮者を務めることになり、大変うれしく光栄に思っております。

オーケストラの刷新の一端を担うことは喜びであるとともに大きな挑戦でもあります。

それぞれの仕事に全面的に責任を持つ日本人の皆さんの職業倫理には常に敬服してきましたが、紀尾井シンフォニエッタ東京のメンバーの方々と仕事をするときには特にそのように感じていました。それは私たちがとても高い目標に到達できる礎となるものです。

私ができることは35年にわたって演奏してきたウィーン・フィルハーモニー管弦楽団でのオーケストラ体験を共有することでしょう。

長期的な目標は、特別で唯一の「紀尾井サウンド」を作り上げる助けとなることでしょう。その響きは少しウィーン風かも…。

このオーケストラとお客様に、たくさんの素晴らしくわくわくするような音楽体験をお届けしたいと思っています。

ライナー・ホーネック

紀尾井ホール室内管弦楽団 コンサートマスター

玉井菜採（東京藝術大学准教授）

桐朋学園大学卒業後、スヴェーリンク音楽院、ミュンヘン音楽大学に学ぶ。プラハの春国際音楽コンクール第1位をはじめ、数々の国際コンクールに入賞している。平成14年度文化庁芸術祭賞新人賞を受賞。

千々岩英一（パリ管弦楽団副コンサートマスター）

東京藝術大学、パリ音楽院卒業。1998年よりパリ管弦楽団副コンサートマスター。ドナウエッシンゲン、ベルリン芸術週間、オールドバラなどの音楽祭にソリスト及び室内楽奏者として出演。日本では東京シティ・フィルハーモニー管弦楽団や東京都交響楽団と共演。2011年フランス芸術文化勲章シュヴァリエを受章。

アントン・バラホフスキー（バイエルン放送交響楽団首席コンサートマスター）

Anton Barakhovsky

ロシア・ノヴォシビルスク生まれ。コーリャ・ブラッハー、ドロシー・ディレイらに師事。1997年ヤング・コンサート・アーティスト国際オーディション(米国)で優勝後、ニューヨーク・デビュー。以後、ソリスト、室内楽奏者としても活躍。

2017年度 紀尾井ホール室内管弦楽団定期演奏会 プログラム

第106回定期演奏会 2017年4月21日(金)・22日(土)公演

【指揮・ヴァイオリン】 ライナー・ホーネック★

ストラヴィンスキー ニ調の協奏曲(バーゼル協奏曲)

バッハ 2本のヴァイオリンのための協奏曲ニ短調BW1043

(指揮&独奏:ライナー・ホーネック、当団コンサートマスター)

ハイドン 十字架上のイエス・キリストの最後の七つの言葉

第107回定期演奏会 2017年6月30日(金)、7月1日(土)公演

【指揮】 ジョン・ネルソン 【ピアノ】 小菅優

ルーセル 「蜘蛛の饗宴」から交響的断章

ショパン ピアノ協奏曲第2番へ短調Op.21

ビゼー 交響曲第1番ハ長調

第108回定期演奏会 <ホーネックのモーツァルト選集 I> 2017年9月22日(金)・23日(土)公演

【指揮・ヴァイオリン】 ライナー・ホーネック★ 【ファゴット】 福士マリ子

モーツァルト ファゴット協奏曲変ロ長調KV191

モーツァルト 交響曲第38番ニ長調KV504「プラハ」

モーツァルト ディヴェルティメント第10番へ長調KV247「第1ロドロン・ナハトムジーク」

第109回定期演奏会 2017年11月24日(金)・25日(土)公演

【指揮】 サツシャ・ゲッツェル 【チェロ】 アントニオ・メネセス

(1曲目は調整中)

シューマン チェロ協奏曲イ短調 Op.129

シューマン 交響曲第2番ハ長調 Op.61

第110回定期演奏会 <ミュトスとロゴス I「四つの気質」> 2018年2月9日(金)・10日公演

【指揮・ヴァイオリン】 ライナー・ホーネック★ 【ピアノ】 小川典子

シューベルト ヴァイオリンと管弦楽のための小協奏曲ニ長調 D345

(指揮&独奏:ライナー・ホーネック)

J.シュトラウス父 ワルツ「四つの気質」

ヒンデミット 独奏ピアノと弦楽のための主題と変奏「四つの気質」

シューベルト 交響曲第5番変ロ長調 D485

※「四つの気質」 ヒポクラテスら古代ギリシャの医師たちが、人間の性質や病気を4種類の体液との関係でとらえたことに由来する考え方。4種類の体液は、四大元素説や、季節、方角なども結び付けて考えられている。[血液(空気・春・東)、胆汁(火・夏・南)、黒胆汁(土・秋・西)、粘液(水・冬・北)]

(★は当団首席指揮者)

<ミュトスとロゴス>

寓話や神話の領域である「ミュトス」と、これに対置されるものとしての論理や聖書の領域である「ロゴス」。

その両方と密接なつながりがもって、中世から今日までさまざまな音楽が作られてきました。

このシリーズでは、神話や聖書、観念に着想された古今の名曲の数々を取り上げていきます。